茨城新聞　2022年(令和4年)6月21日　火曜日

筑波山「自然の姿に」

つくばみらいのNPO 植樹活動17年目

筑波山の植生を自然に近い状態に戻そうと、つくばみらい市のNPO法人「地球の緑を育てる会」が始めた植樹会「筑波山水源の森づくり」が17年目を迎えた。山麓に自生する広葉樹の実を拾って苗木を育て、スギやヒノキの人工林の中に植えてきた。針葉樹と広葉樹が交じった姿を目指す息の長い取り組みだ。理事長の石村章子さん(78)は「自分たちでできることを行い、責任を果たしたい」と話す。

スギ林の中で広葉樹の苗木を植える植樹会の参加者＝筑波山

人工林に広葉樹の苗木

筑波山は1934年に国策として植林事業が初めて実施された歴史的な場所だ。世界恐慌を受けて植林による資源の確保が提唱され、筑波山麓にスギ、ヒノキが植えられた。戦後も木材需要を賄うためスギ林が造成された。

筑波山神社などによると同神社の管理する林は約375㌶。輸入材が増えた影響で木材の利用が伸び悩み、間伐などの手入れも難しくなっていた。「育てる会」と神社で協議し、植物生態学者で横浜国立大名誉教授の宮脇昭さん（故人）を顧問に迎え、スギやヒノキに偏った森から自然な森への転換を目指して植樹が始まった。

同会では傷んだり生育が悪かったりするスギを自分たちで伐採し、代わりにタブノキやシラカシといったその土地に合った広葉樹の苗を植える。「宮脇方式」と呼ばれ、国内外で成果を上げてきた方法だ。育てる会ではこれまでに約5千人が参加し、企業・団体による植樹を含め約4万5千本を植えた。石村さんは「専門家の意見を聞いて切るべき木を決め、土地の生態系に適した木を植えている」と説明する。

新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった5日の植樹会には、全国から約300人が集まった。女体山の登山道からスギの木が立ち並ぶ斜面に分け入り、スダジイやヤマザクラ、山火事で延焼を防ぐ効果のあるタブノキなど広葉樹10種の苗木計千本を新たに植えた。

東京都内から書道教室の仲間と来た三浦佳大君(10)は「今は小さいけれど100年後には他の木みたいに大きくなると思うと感動する」と笑顔。石村さんは「未来の子どもたちを守るためにも、植樹を通じて元の生態系に少しでも戻していければ」と力を込めた。

（木村優斗）